ゆるされて流石に花の折にくし　草甫
源や鶴とことはにも、の家　知一
拾ふにも冷たし梅の活こほれ　俊路
みとりさす柳のかけや水のゆれ　香甫
いかなれは此年月を鳴子曳　緑貞
花活て果報らしさや鍬遣ひ　波青
白栲の雪やことしも五日たつ　如壷
よい風に諷ひ出しけり田草取　等栽
黄鳥を左右に聞て峠越し　為山
よい年や鼠笑ふて明の春　紫一女
昼顔やあたりに白き花もなし　三巴
年も今明たはかりや井の雫　巌の本
世もゆるみこゝろものひて春の鐘　泉舎
蝶飛やけふも日凪の鱗雲　丈交
長々と我影うれし初日の出　生宜
鶯のむかひこゝろや庭ありき　留旨
うくひすよ誰に聞せる欲もなし　岱水
葉に添ふて行義に咲や桐の花　富草
市へまて行かて売きる薺かな　醉扇
人の日や草にぬらせし小俎　立機
鐘の音の一つは遠し夕かすみ　日の出
とつかりと氷流れてかすみかな　種丸
咲色の枝うつりして梅のはな　槙子
月花を添て雪見や隅田河　湖月
行としや水にも見ゆる波の皺　月中
和らかな物のはしめや梅の花　楽哉
柳あり道は知れよしおほへよし　精泉
青梅や牽出す馬の脊に落る　蓑甲
いち〳〵に蕾の露やうめの花　只中
冷かや障子ひと重のしめこゝろ　千もと女
月と日の甘みもあるや冷し瓜　琴友女
すゝしさや出舟待間の立はなし　柳糸女
田つゝきや柳の闇をとふ蛍　圭珂
勢ひのよき雨来たり掖のうへ　山松
晴きれは霞添けり朝の不二　小鱗
なく鳥も水を乞ひけり梅の垣　燕子
はしたなや桜の鉢の有処　新車
行鳥のなしむや花の遠くもり　竹叟

落る日の抱込れけり花の中　三和
うね〳〵と運ふや鐘も春の声　泰布
日の影や一段白き山さくら　涼荷
おさな気にうつる手業や雛の膳　白醉
さらし井の水はき莚敷せけり　糸川
手枕を外して聞やはるのかね　探路
はつ夏や柳に見たる雨の色　梨恙
元日の事足り顔や夕からす　千竹女
初夢や見切のつかぬ小松はら　里水
そよくたひ伸る草木やはるの風　梧水
晴々し元日の空暮てまて　逸雨
松の根は乾きもはやき雪解かな　守童
それ程に見てをれはこそ梅のふり　貴稱

新居賀章

現在庵新居に迎春を賀す
明ほのやはしめてしりし海苔の味　松翁
市坊をうしろにして月花の詠めに
心を養ふ老師か新居を賀して
此春は若うなられし思ひせり　狐登
春もやゝけしき整ふ頃より雪見に転ふ
ところ迄もいなからにして眺望心の
儘なれるは実に都会の仙室とも申へきや
こゝへ来て酒にやならん春の水　芳草
宮戸川の辺りにうつられし
師翁の新居に遊ひて
川へたつ花には風も待れけり　靖路
隅田河につゝく浅草に庵をうつされしかは眺望
自然にして老師か望一つ足りぬる事になん
傘さして出るも興あり小松ひき　伍柚
市中に居て市中を遁れし師翁か転庵を寿
野こゝろにけふよりそめて若菜籠　素語
こたひ師翁転庵せしも需めぬ
幸ひにして朝夕の眺望日ころ
好るゝ所なれはその歓ひを賀
植つけし芝もなしみて梅の花　傾志
見定るけふを桜のさかりかな　水心
去年をさなきに還りてより
隙行駒かたに居をうつし